エッセイ

世界へ 世界から

日本的基準の一歩先へ

紫舟

海外で書を披露したり展示したりする機会に恵まれてきた。

イタリア各地での一ヵ月の展示とベネチアでの国際的な芸術祭を終え日本に帰ってくると、いくつか取材依頼が入っていた。そのため現地で撮った写真を用意しながら、やるせない気分になった。

取材を終えできあがったどの記事にも、「世界で活躍する…」「海外で絶賛…」「国際的に…」そんな賞賛が並んでいた。記事の写真には、多くの観衆に囲まれていたり、サインを求める長蛇の列があったり、展示を見に集まった大勢の人びとが写っていた。その賞賛を裏付けるには十分だった。

でも、わたしにはわかっていた。実際は通用しなかったことを。彼らは、極東アジアの日本という島国にこんな伝統文化があるんだと、目新しくめずらしく感じただけだということを。

海外二ヵ国以上で何かをすると、「国際的に…」と言ってもらえる。海外の人たちに囲まれた写真を用意すると、「世界で絶賛…」と言ってもらえる。とてもラッキーだ！

でも違うと思った。

日本の伝統的な書は、日本にこんな文化があるんだということを伝える以上になること、ちゃんと世界に通用することを伝えていきたい。

知らず知らずのうちに、「これはわたしたちの文化だから」という判断基準をもって、理解するには勉強が必要で美意識が必要で、というのもひとつだけれど、理解してくれるのを待つばかりでは、ずっとそのままだ。

「わたしたちの文化」という日本的基準と、世界に通用する世界基準。そのために、わたしはハリウッド映画の題字を書くことを目指すことにした。

一本の線を切なく書くことができたり激しく書ければ、アルファベットも表現できる。映画の象徴的なシーンを文字に見立てたり、一番伝えたい感情を線に込めたり。「結果として今回のハリウッド映画は日本の書を題字に用いました」ということもありうるだろう。

そうして完成した題字は映画とともに世界配信され、いろんな国の伝統も文化も異なる人びとが見て映画のストーリーや感情など、何か感じてもらうことができれば、そのときこそ、「世界に通用する書」といえると信じている。

文字を表現する手段としての書が、日本的基準をこえ世界基準へ。世界に通用する日本の伝統としての書を目指そうと考えている。

シシュー／書家。6歳より書をはじめる。おもな作品の提供先は、NHK美術番組「美の壺」題字 掛軸文字一式、朝日新聞で書の連載「いい名」(2004.11～2007.3)、浜崎あゆみミュージックフィルム「月に沈む」題字、「ベネチアビエンナーレ2005企画展」など。常設展示は「フォルクスワーゲン」「アウディ」一部ショールームなど。
http://www.e-sisyu.com

月刊 みんぱく

目次

OCTOBER 2007
月刊みんぱく 10

01 エッセイ 世界へ世界から
日本的基準の一歩先へ
紫舟

02 特集 トイレ
トイレの文化、文化のトイレ
スチュアート ヘンリ
厠(かわや)は何故恐い
常光 徹
エコ・トイレと高層(=高槽)トイレ
—西アフリカでの体験から—
川田 順造
循環的活用—中国—
横山 廣子
トイレは野天で—インド—
金谷 美和
日本とのトイレつながり—トルコ—
木村 周平

08 モノ・グラフ
棒締頭絡(ぼうじめとうらく)
小島 摩文

10 地球ミュージアム紀行
ハノイで人気の博物館
樫永 真佐夫

11 表紙モノ語り
沈香(じんこう)のかおる香炉
信田 敏宏

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々
アンデスとアマゾニアの挟間で
木村 秀雄

15 時論・新論・理想論
思い出よ、思い出よ、私の思い出よ
佐藤 浩司

16 外国人として生きる
僕の幸せ
—ニッさんがタイ料理屋をひらくまで—
岡部 真由実

18 地球を集める
予期せぬことがいっぱい
—中国での映像取材—
塚田 誠之

20 生きもの博物誌
米のある風景
長谷 千代子

22 フィールドで考える
狩猟採集社会の老人たち
林 耕次

24 開館30周年記念事業のご案内
次号予告・編集後記

※表紙解説は11ページ